

家族周期的アプローチの強みと弱み

森 岡 清 美

I

全体のテーマである「生活調査における家族周期的アプローチ」をくぐり抜けて、私はこのテーマの「生活調査」の方ではなく、「家族周期的アプローチ」の方に力点をおいてレポートをしたい。主に、方法としての家族周期的アプローチの特色というか、どこに強みと弱みがあるかということについて、前後5回にわたる社会保障研究所の調査からつかみえたところを報告したい。この、強み弱みということは客観的、絶対的な意味でいったのでは問題にならない。当然、「生活調査」という目的とのかかわりあい、強みも弱みも評価されなければならない。生活を、したがって生活調査をどう考えるかということについては、私自身、多少とも考がえがなくもないが、そうした理論的な捉え方と現実の調査との関係はなかなか難しい。理論的な考え方そのものが、現実の調査項目として操作化されるとは限らないのである。そういうこともあるので、生活ないし生活調査の問題は括弧のなかにいれて、家族周期的アプローチのアセスメントをしたい。

II

家族周期的アプローチというのは、ご承知のとおり、家族を時間的な系列の中で、家族生活あるいは家族の生活構造の時間的な系列の中で、把握する。したがって動態においてとらえることである。この把握を実地におろすにはどうしたらよいか。図1—1,2（形態：段階、タイプ）は、家族周期的アプローチを現実の調査におろす場合にどのようなやり方があるか、5回にわたるわれわれの調査の中でどのような仕方をしたか、ということを要約的に示したものである。

まず、周期モデル。家族周期的アプローチを使う場合には、一定のモデルを構想するのである。モデルは、平均初婚年齢とか、出生児数とか、出生間隔とか、平均余命とかいう、人口学的な変数を組み合わせることで作ることになる。そのさいに、家族がいったいどのような性格を持っ

○ 周期モデル(家族類型別に構成)

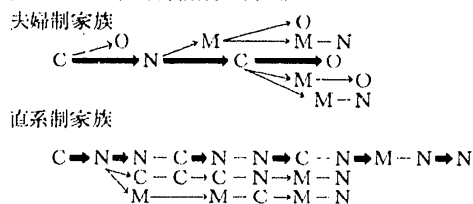


図1—1 形態：段階・タイプ（その1）

ているか、どういうオリエンテーションをもっているかによって、モデルを作るさいに使われる基本的な人口学的変数の組み合わせ方が違ってくるわけである。

現代日本の家族を観察する場合に、大きく類型的に「夫婦制家族」と「直系制家族」に分けて考える。夫婦制家族というのは一代きりの家族であり、直系制家族というのは子孫にわたって代々家系を継承していく家族である。そして直系制家族から夫婦制家族への移行、または両者の混在という2つの可能性を考える。現実には夫婦制と直系制と2つにくっきり区別できるわけでないが、現実をみるために、一応理念形的にこの2つに分けて、それぞれについてモデルを考えていきたい。その上で両者混在した状態を理解するのがよいのである。家族類型としては、中国、インドなどの複合制家族があるが、これはわが国では考える必要はないので、前述の2つで考えてみる。

図1—1の矢印は、時間の展開を示している。そしてC, Nなどは家族の形態を表わす記号である。太い矢印と細い矢印があるが、太い方は主パターンで、大多数はこの形をとるとみなされる。これは人口学的な変数の組み合わせからいうことができるし、常識的にも経験的にも裏づけられている。つぎにCとかNとかの家族形態を表わす記号については、後掲の小沼レポートの資料の中の45年掛川調査の調査対象欄を参照していただきたい。Cは夫婦だけの世帯、Nは夫婦と子どもからなるいわゆ